

# せわやがトカラ情報

十島村教育委員会  
〒892-0822 鹿児島市泉町 13 番 13 号  
TEL 099-227-9771

南北160km 「心をつなぎ気概に満ちた」十島の教育

## 1 月…子牛の初せり

教育長 有村 孝一

1 月 16 日、午前 9 時過ぎ、日置市の鹿児島中央家畜市場を訪問しました。この日、今年初めての子牛のせりを見学するためです。ここ数年十島村では、基幹産業としての畜産が順調に伸びてきています。十島村における成長産業として官民一体となって取り組んできた成果ではないかと思えます。市場は、せりが始まるまでの間に、最後に世話をする人たちが大変賑わっていました。きれいに磨きをかける人、談笑をする人、忙しそうに動き回る人と、それぞれにせりの開始時間までの間を過ごしていました。



子牛は、決められた場所にきれいに並べつながられています。約 9 か月程度の牛ばかりで、体重が去勢牛で 270kg から 300kg ぐらい、雌牛で 270kg ぐらいです。全部で 320 頭の牛が出場ということで、その光景は素晴らしく壮観なものでした。これだけの牛を見るのは初めての事でしたので、大変驚きでした。

この日は今年最初ということで、あいさつなどのセレモニーがあり、いよいよせりの開始となりました。子牛はきちんとレールにかけたロープに引っ張られて入場します。わずか 10 分足らずの間に、数十万円の値段がついていきます。中には、100 万円を超えるものも出ました。手元の資料には、入場番号、登録番号、血統、母の名、生産者などが記入されていて、その牛の情報が一目で分かるようになっていきます。次々にせりは手際よくすすみ、320 頭分が、13 時 30 分頃には無事に終わりました。

十島村からは 25 頭の出場でしたが、平均 80 万円ほどの値段がついたようでした。村の方が来ており見る視点が違って、さすがに研ぎ澄まされた目をしているなど思いました。苦勞をして育てて、島から鹿児島まで運び、やっとせりを迎えるその苦勞を思うと頭が下がる思いがしました。

せりを見に行っただけで、村の基幹産業をこの目で確かめたかったのと、若い人たちに担って欲しいという思いがあったからです。

学校においても、郷土教育の一環として、「総合的な学習の時間」の中で、畜産について学ぶ計画を立てている学校もあります。

子どもの頃から興味を持つことが大切だと思います。成長した子どもたちが、将来せりで牛を引いている姿を想像する時、十島村の畜産の発展を願わずにはおられません。



## 祝

### ◆十島村から 9 人の新成人誕生

平成 29 年 1 月 9 日 (月) に、十島村役場で「新成人を祝う会」が開催されました。今回は 9 人の新成人の内、7 人が出席し、その家族や中学校時代の恩師、トカラふるさと会、役場職員含めて 57 人の盛大な会となりました。



式典では、村長から「失敗しても何度でも挑戦する強靱な精神力を持って欲しい。」と熱いエールが送られました。また「将来、皆さんの中から一人でも十島村に戻ってきて欲しい。」という期待も寄せられました。その後、一人ずつ「新成人の抱負」が述べられました。「今頑張っていること」「十島村での島民への感謝」「将来の夢」「家族や恩師への感謝」など、発表する新成人の目は輝いていました。特にその中の一人が、将来地元の島に帰って保育の仕事に携わりたいと述べたことは、とても嬉しいことでした。写真撮影の後、サクソフォンとピアノによる演奏会が開かれ、会場は華やかな祝賀ムードに包まれました。最後に昼食祝賀会が催され、7 人の新成人は、会場の人々と和やかに談笑しながら楽しいひとときを過ごしました。出席できなかった 2 人も含めて、十島村から巣立った 9 人の新成人の今後の活躍を期待したいと思います。

## 宝

シリーズ この島にやってきて  
「宝島で考える」

宝島中学校 2 年 松下 天哉

去年の 4 月から宝島に山海留学生として来ていま

す。宝島には、祖父母が住んでいて、小さい頃から行き慣れた場所です。その祖父母の家に住んでいます。前の学校の第一学年の生徒は、宝島の人口とほぼ同じくらいでしたが、宝島では全校生徒が自分を含めて 14 人です。人数が少ない分、先生と話す時間が多くなり、学力は自然と上がります。



宝島では、本土では経験したことのないものもあります。家々をまわっておかしをもらう「みかんたも一れ」、十五夜相撲、一周道路を走る島内一周駅伝、お盆の時期に行うご先祖様のお迎えと見送り、お宮詣りなど様々な行事があります。宝島に来るまで将来について考えることなどありませんでしたが、宝島に来て少しずつ固まってきました。しかし、まだまともでないで、宝島にいたいと思っています。



南日本新聞「ひろば欄」H28. 12. 19掲載  
「てがみかいて、おはかにいれた」  
諏訪之瀬島小学校 1 年 沖園 豪陽

すこし目をあけたままで、つめたくて、かたくなっているキャベジがいました。キャベジは、ぼくが 5 さいのときからいっしょにくらしているハムスターのなまえです。キャベジが大すきで、うれしそうにパリパリとたべるところがかわいくて「キャベジ」という名前にしました。



「かなしいおしらせがあります。キャベジをみてきてごらん。」がっこうからかえると、おかあさんが僕にちいさなこえでいいました。ぼくは、よくわからないまま、キャベジのいえをのぞきました。「キャベジがしんじやった。」大きなこえでさげびました。なみだが、たくさんでてきました。もうあえなくなる。もうあそべない。どうしてしんじやったの。ぼくがえさをちゃんとあげなかったのかな。なみだがとまらなくて、いきができなくなりました。

つぎの日、おはかをつくりました。土をほって、ふわふわのマットの上にキャベジをねかせて、まわりに大すきなキャベツをいれました。「キャベジ、いつもあそんだね。いつまでも、ともだちだよ。」ぼくは、キャベジにてがみをかいていれました。天ごくについたかな。

## 輝

南日本新聞「若い目賞」2 校目

諏訪之瀬島小・中学校が 12 月の「若い目賞」を受賞しました。十島村では、5 月の小宝島小・中学校に続いて 2 校目となります。聞くところによると、ただその月に投稿が多かったからだけでなく、それまでの長い期間の継続的投稿がないとこの賞はいただけないようです。その意味で、十島村から 1 年間に 2 校も受賞したことは画期的です。この受賞は、ただ単に、

学校が受賞したということだけでなく、十島村の子どもたちが、社会に向けて広く発信していることの証であり、その学校はもちろんのこと十島村の良さを県内外に紹介していることにもなっています。今後、他の学校もますます発信力を高め、十島村に行きたいと思う児童生徒が増えれば、とても嬉しいことです。

## +

島村の小・中学校からのメッセージ

諏訪之瀬島小学校 教諭 沖園 良介

「大きな魚をありがとうございます。また、船に乗せてくださいね。」息子と島民の方との会話です。恵まれた自然。心が和む環境。そして、温かい島民の方々。「島の子以上に島の子だ。」と言われる息子の姿が、諏訪之瀬島小に来て良かったと私に確信させてくれます。諏訪之瀬島小に赴任して、もうすぐ 1 年が経とうとしています。私にとって、新しい一歩でしたが、妻、特に息子にとっては、貴重な機会になっていることは間違いありません。複式学級での教育を強く望み、本校勤務を命じられた日、子どもたちを前に、「何ができるのか。」楽しみで仕方なかったことを思い出します。また、本校開校により、新たな歴史の始まりに携わることへの感謝とその使命に込めていかなければと、日々研鑽の毎日です。極小規模校での教育は、初めての経験であり、その分学ぶことも多く、毎日が新鮮です。子どもひとり一人を見ながら手立てを工夫できることは、喜びであり、楽しみであり、何より自分が成長できる機会であると実感しています。一方で、『子どものために』という思いで務めてきたはずの自分に、まだできることがあったはずだと、これまでの自分の教育観に自問し、振り返るよい機会になっています。

さて、本校に勤務するようになって、教師として、改めて実感したことが 2 つあります。

一つ目は、『地球が子どもを育てる』ということ。島民が子どもひとり一人に声を掛け、気持ちのよい挨拶が飛び交い、全員で協力しながら行事に取り組む姿に感動しました。

二つ目は、『個の実態に沿った教育の大切さ』です。これまで私は、自分の物差しで「こうあるべき。」と判断してしまいがちでした。今、3 人の子どもを前に、試行錯誤し、どんな手立てが必要かを個々に考え、その変容に喜び、充実感と使命感、そして何より共に学び、共に成長していく『共有』を実感しています。『学び続ける者のみ教える資格あり』子どもを前に、今できることは何かを自問し続けます。

「教職員仲間であるあなた」への

私からのメッセージ

魚釣りに野菜作り、島民との親睦と日々学校を離れても充実する日々。この環境が、自分の価値観を広げ、人として成長させてくれます。「今ある場所で、花を咲かせる。」使命感に燃え、目の前の子どもと向き合える。ここは、教師にとって恵まれた環境です。